

早稲田大学大学院日本語教育研究科

# 博士學位申請論文概要

## 論 文 題 目

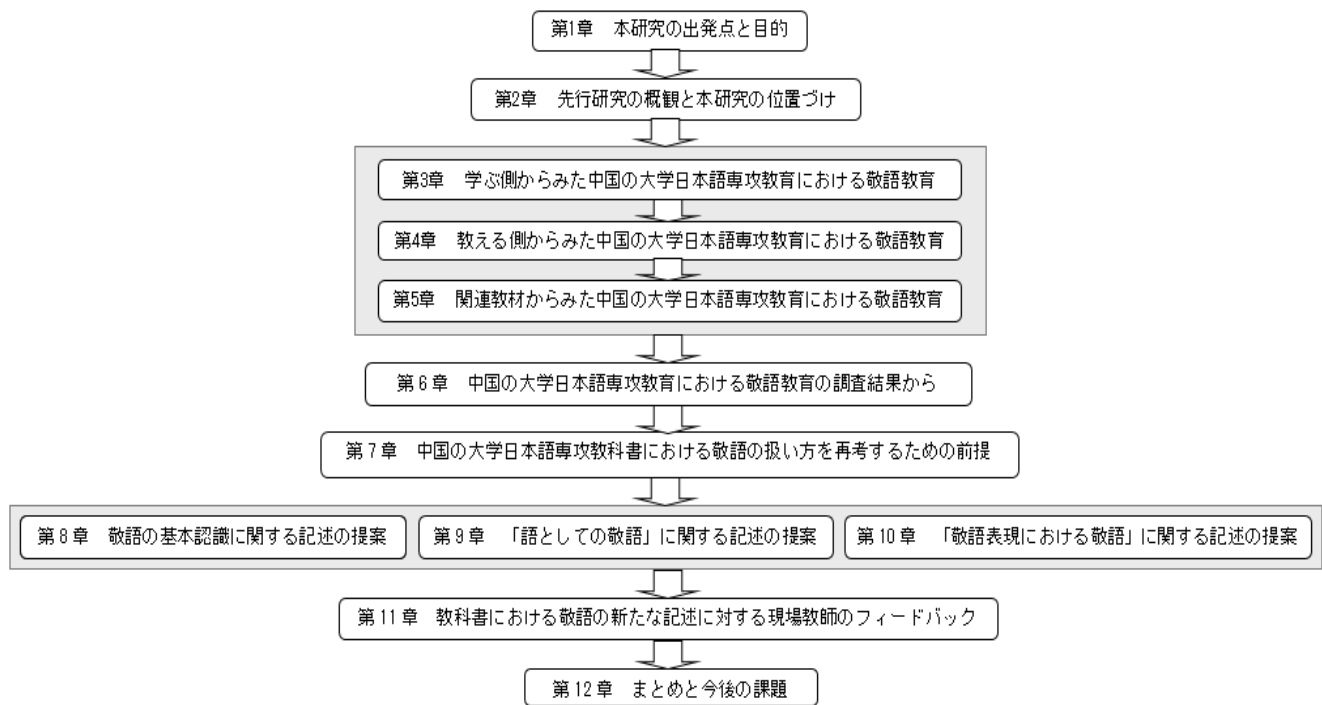
教科書からみた敬語教育の改善に関する研究  
—中国の大学における日本語専攻教育の調査から—

申 請 者

任 麗 潔

2016年3月

本研究は、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育のあり方を改善することを目的とし、元学習者・現場教師・関連教材という三つの観点から現状の問題点を指摘した上で、「語としての敬語」と「敬語表現における敬語」とを区分する考え方（蒲谷他 1998、蒲谷 2013）に基づき、敬語の捉え方の問題点を理論的に整理することによって、教科書における敬語に関する新たな記述を構想するとともに、その具体的な記述について提言するものである。本研究は、以下の全 12 章より構成されている。



【図 1】 本研究の全体構成

## 第 1 章 本研究の出発点と目的

国際交流基金（2014）によると、中国にいる日本語学習者数が世界 1 位となった。2000 年以降、日本語学科の新設や既存学科の定員増などにより、日本語を専攻とする学部生の増加が特に著しい。彼らの多くは、大学入学時に日本語をゼロから始め、3 年次には日本語能力試験 N1 に達することが要求されており、卒業後は、日系企業への就職や渡日留学を進路として選ぶ人が多いと報告されている。日本語を用いて日本人や日本社会と接触する以上、敬語は避けられない課題だといえよう。しかし、現代中国語には体系的な敬語が存在しないため、中国人日本語学習者にとって、敬語は最も難しい学習項目の一つだといわれている。特に、日本人との接触も少なく、敬語を見聞きする機会が限られている中国国内にいる学習者の場合、敬語習得がますます困難であると予想される。

日中両国の文化背景や言語体系が異なるという現実を変えられない以上、教育面における工夫がより重要となってくる。しかし、中国の大学で日本語専攻を卒業した元学習者を対象として、敬語及び敬語教育に関するインタビューを行った結果、調査協力者らが敬語の必要性と重要性を認識している一方、敬語に関する様々な困惑点と困難点を抱えており、また自分の大学時代に受けた敬語教育に対し、多くの不満を抱き、改善の必要性を強く感じていることが明らかとなった。

以上を踏まえ、本研究では次の 2 点を明らかにすることを目的とした。(1) 中国の大学日本語専攻教育における敬語教育には問題点があるのか。あるとすれば、具体的にどのような問題点があるのか。(2) 問題点を改善するためには、どうすればよいのか。

## 第 2 章 先行研究の概観と本研究の位置づけ

先行研究を概観した結果、主に五つの傾向が見られた。①2000 年以降、中国の大学日本語専攻教育に関する研究が様々な角度から行われているが、中国人日本語学習者にとって最も難しいといわれる敬語に関する教育に着目するものはほとんどない。②日本語教育における敬語教育・待遇表現教育に関する先行研究が多く見られる中で、その多くは日本にいる留学生を対象としており、中国にいる学習者、殊に大学における専攻学習者に注目する研究はほぼ見当たらない。③従来の敬語教育・待遇表現教育に関する研究は、教育経験を持つ研究者による内省研究や、学習者を対象とするアンケート調査を研究方法とする量的研究、また近年では実践報告が主流であり、教育の当事者の意識面に注目する質的研究は少ない。④敬語教育・待遇表現教育に関する先行研究には、学習者や教師を対象に調査し、その結果を論文に反映させたものが多く、教科書を中心とする教材に関する議論はあまり行われていない。⑤中国人日本語学習者を対象とする敬語教育・待遇表現教育に関する研究は、指導上の問題点を指摘し、改善するための提言を試みる段階にとどまる研究がほとんどであり、具体的にどのように実現させるのかについては詳しく言及されていない。

上述した先行研究の限界を踏まえつつ、研究目的と照らし合わせ、目的(1)のために、次の四つの課題を設定した。【課題 1】中国の大学日本語専攻教育における敬語教育について、学ぶ側はどのように考えているのか(→第 3 章)。【課題 2】中国の大学日本語専攻教育における敬語教育について、教える側はどのように考えているのか(→第 4 章)。【課題 3】中国の大学日本語専攻用の教科書を中心とする教材において、敬語はどのように扱わ

れているのか（→第5章）。【課題4】課題1・2・3を踏まえ、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育には、どのような問題点が存在しているのか（→第6章）。

そして、目的（2）のために、次の二つの課題を設定した。【課題5】中国の大学日本語専攻教育における敬語教育のあり方を改善するために、どうすればよいのか（→第7、8、9、10章）。【課題6】本研究が提案する敬語教育の改善案（教科書における敬語の新たな記述）について、現場教師からはどのようなフィードバックが得られるのか（→第11章）。

### 第3章 学ぶ側からみた中国の大学日本語専攻教育における敬語教育

中国の大学で日本語専攻を卒業後来日している元学習者を対象に、敬語及び敬語教育について半構造化インタビューを行い、学ぶ側からみた敬語教育の問題点を探った。調査協力者の語りを質的に分析した結果、「敬語に対する苦手意識」、「敬語に関する意識変化」、「高い敬語レベルへの憧憬」、「受けた敬語教育への不満」、「敬語教育の改善への期待」という五つのカテゴリーが浮かび上がった。具体的には以下のようなことである。

大学時代に敬語教育を受けたものの、元学習者らは長い間、敬語に対し嫌悪感と抵抗感を抱いているという。それは、表現形式が複雑でバリエーションも多く、混同せずに記憶するのが苦痛であることと、初級の短期間で教わったため、体系知識に対しても、使い方に対しても、多くの困惑点と困難点を抱えていることに起因している。また、大学の時、丁寧語以外の敬語を使う機会はあまりなく、使わなくても困らなかったため、元学習者らは尊敬語や謙譲語の必要性と重要性を認識していなかった。

しかし、大学卒業後、就職や来日の失敗体験を通し、敬語が使えないことによる不利益を知り、徐々に尊敬語や謙譲語の必要性と重要性に気づき、元学習者らの敬語意識に顕著な変化が見られた。同時に、他人の使っている敬語を理解できても、自分がスムーズに使いこなせないことを悔やみ、自分の敬語レベルへの不満を感じ始めた。次第に、敬語を上手に使う人に好印象を抱き、どんな場面でも適切に敬語が使える人へ憧れるようになった。

一方、敬語への苦手意識は大学時代と変わらず、就職または来日してからも改善されなかったようである。敬語による困惑点と困難点は意識面・形式面・運用面と広範囲にわたっており、いずれも大学時代に受けた敬語教育と深く関わっていることが判明した。大学で受けた敬語教育について、導入方法・練習方法・教育時期・教育期間・授業内容・授業形態をめぐる、様々な不満が語られた。そして、これらの不満を改善するためにそれぞれ

期待やアドバイスが寄せられた。

#### 第4章 教える側からみた中国の大学日本語専攻教育における敬語教育

中国の大学日本語専攻教育現場に携わっている中国人教師を対象に、敬語及び敬語教育について半構造化インタビューを行い、教える側からみた敬語教育の問題点を探った。調査協力者の語りを質的に分析した結果、「パターン化された敬語教育」、「満足できない学習者の敬語レベル」、「目指したい敬語教育の改善」、「抱えている現実的な悩み」、「教材への強い依存」という五つのカテゴリーが浮かび上がった。具体的には以下のようなことである。

現場教師が行っている敬語教育は、元学習者らが受けた敬語教育とかなり合致している。それぞれの教育現場では、敬語は初級に当たる1年次の最後または2年次の最初の1～2週間で、集中的に指導されている。また、教師主導型の講義式授業が主流であり、授業内容に関しては、敬語の種類や働き、表現形式などの説明に重きが置かれており、練習としては、言い換え・書き換えや短文通訳、本文暗誦がメインであるという。このことから、敬語教育がある程度パターン化されていると考えられる。

20年以上も上述した敬語教育を繰り返す教師もいるが、現場教師たちは学習者の反応や敬語レベルについては、授業の内容を十分に消化できず、多くの困惑点と困難点を抱え、敬語に対する強い苦手意識を持つ学習者が多いと語っている。学習者の困惑点と困難点を詳細に挙げてもらったところ、元学習者の意見と重なっており、やはり意識面・形式面・運用面という三つに分かれている。学習者の敬語レベルに満足できない教師は、自分の行っている敬語教育に疑問を抱いた。目指したい敬語教育については、元学習者同様、主に教育時期・教育期間・授業形態・授業内容・練習方法という五つに集中していることが分かった。そして、教師たちも大学時代に元学習者と類似した敬語教育を受けたという事実が判明し、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育の問題点は、改善されないまま、長年にわたり存在している可能性が示唆される。

教師たちも改善の必要性を強く認識しているにもかかわらず、抱えている様々な現実的な悩みが、目指したい敬語教育の実現を妨げていることも浮き彫りとなった。具体的には、シラバスやカリキュラムの制限・教科書における敬語の扱い方・授業時間の限界・教師自身の敬語レベル・授業準備の便宜・敬語使用率の低さなどが共通して挙げられている。こ

これらの悩みが原因となり、現場教師の多くは改善しなければならないと思いつつも、最終的には教材に頼って敬語を教えるという消極的な結果となった。

## 第5章 関連教材からみた中国の大学日本語専攻教育における敬語教育

中国の大学日本語専攻教育の関連教材（『教育要綱』・教科書・教師用指導書）における敬語の扱われ方を分析し、敬語教育の問題点を探った。その結果、それぞれ以下のことが明らかとなった。

『基礎段階教育要綱』（1・2年次）においては、敬語は名詞やテンスなどと並び、2年次の語彙・文法レベルの学習項目として位置づけられている。また、一般的な表現形式が身に付くことを主目的としており、形式に重点を置く傾向が見られる。その一方、『高学年段階教育要綱』（3・4年次）においては、基礎段階における「形態論」という扱われ方から一転し、場面や相手に合わせ、適切に敬語を使用する能力が要求されており、敬語はコミュニケーションレベルで扱われている。そして、敬語三分法を採用しており、各種類の敬語の表現形式がまとめられているが、必要性と重要性、働きや使い方などその他の記述は全く行われていなかった。

教科書における敬語に関する記述は、主に初級の最後に集中しており、中・上級ではほぼ現れていない。また、敬語の仕組みに関する記述には、「敬語の種類に関する記述の不統一性」、「尊敬語と謙譲語の働きに関する記述の狭小化」、「表現形式の示し方の不明確さ」、「敬語の必要性と重要性に関する記述の欠落」などの問題点が潜んでいる。更に、敬語の各項目に関する説明を見ると、「接続ルールなどの文法説明がメインであり、使い方に関する説明が不十分」や「人間関係が不明な例文が多く、場面との関連性が薄い」などの問題が指摘できる。最後に、敬語に関する練習問題からは、「模範例にならい、敬語の表現形式に言い換える・書き換えるといった練習が最も多い」、「先生と学生の会話がほとんどであり、場面が非常に乏しい」、「言い換え・書き換えるのほかに、穴埋めや質問応答、中文和訳といった教師主導型の出題形式に集中している」などの傾向が見られた。

教師用指導書における敬語の扱い方には、①教育時間や到達目標、教育内容など、教師が指導を行う際に、目安となるような記述は見られたものの、いずれも一文程度であった。②単語の説明や例文補足、練習問題の解答例がメインであり、教科書の記述における問題点を補うような記述は見られなかったという二つの傾向が見られたことから、教師用指導

書はあまり機能していない可能性が浮上した。

以上の分析結果を第3章と第4章の調査結果に照らし合わせた結果、以下の関連性がうかがえる。『基礎段階教育要綱』では表現形式、『高学年段階教育要綱』では運用能力という2段階の敬語指導方針が示されているが、教科書と教師用指導書を見ると、1段階目の方針は反映されているのに対し、2段階目の方針は全く反映されていないことが分かる。第3章と第4章の調査においても、調査協力者が受けた・行っている敬語教育は、1年次の最後または2年次の最初に集中しており、3・4年次では敬語教育をほとんど受けていなかった・行っていないことが明らかとなった。よって、敬語教育が表現形式重視の初級にとどまっており、運用能力の育成にはつながっていないと考えられる。適切に使うことを教育目標とせずに、初級の最後で集中的に表現形式を中心に敬語を教えるのは、学習者の心理的負担を増やす一方、実用性への認識を低くしてしまうことが懸念される。

そして、『基礎段階教育要綱』における敬語の扱われ方は、教科書と教師用指導書の分析で指摘した問題点と深く関わっていることも確認された。更に、これらの問題点は、第3章の元学習者による「受けた敬語教育への不満」と第4章の現場教師による「パターン化された敬語教育」にも現れている。よって、関連教材の問題点がそのまま学習者に教えられており、敬語教育に悪影響を及ぼしていると考えられる。このことは、「多くの現場教師が教材に頼って敬語を指導する」ということの裏付けとなり、関連教材が敬語教育の拠り所となっていることがうかがえる。

## 第6章 中国の大学日本語専攻教育における敬語教育の調査結果から

第3章から第5章の調査結果を踏まえ、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育の問題点について、「一貫しない教育目標」、「不適切な教育時期と期間」、「表現形式に偏る教育内容」、「学習者の主体性を重んじない教育方法」、「再考すべき教材における扱い方」、「敬語教育に苦手意識を抱く教師」、「教室内の指導に強く依存する学習者」という七つを指摘した。しかし、中には敬語教育のみならず、中国の大学における日本語教育全体に共通する問題点も含まれており、それぞれの原因と改善の取り組みも実に多岐にわたっているため、七つの問題点をすべて解決するには、教育システム全体を見直す必要があり、とても容易に解決できる問題ではない。そこで、敬語教育を改善するための糸口を探ることにした。

まずは、第3章から第5章の調査結果を通し、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育において、教科書が極めて重要な位置づけを占めていることを確認した上で、敬語教育の改善はまず教科書に焦点を当てるべきだという推論を立てた。次に、日本語教育における代表的な教材論を概観した結果、教科書を中心とする教材は、教師の教育指導にとっても、学習者の学習活動にとっても、大きな拠り所であり、重要な役割を担っていることが確認され、教科書に焦点を絞るべきだという推論の理論的根拠となった。

更に、教材に対する捉え方やその役割については、以下の相違点が見られた。日本語教育教材論においては、教科書を中心とする教材は、教師の役割の一つとされるコースデザインの一部であり、シラバスをどう学習者に教えるかを計画するというカリキュラムデザインの段階に属し、コースデザインの柔軟化を可能にする役割を持つべきだとされている。その一方、中国の大学日本語専攻教育における敬語教育においては、教科書はコースデザインのほぼすべてであり、「何ニ基ヅキ」「何ヲ」「イツ・ドノヨウニ」教えるかのほとんどを提供し、支配している傾向が見られる。

以上の相違点の背景には、「学習者の多様化がそれほど進んでいない」、「中国の大学日本語専攻教育には画一性が求められる」、「コースデザインなどに対する教師の認識がまだまだ低い」という中国の大学日本語専攻教育が抱えている独自の事情が関わっている可能性が高いことを指摘した上で、敬語教育を改善するためには、まずは決定的な役割を果たしている教科書に焦点を絞るべきだという推論の必然性を訴えた。

最後に、教科書の観点から敬語教育に改善をもたらす可能性については、七つの問題点と絡めつつ、次の4点を指摘した。①教科書における敬語の扱い方を再考すれば、敬語教育のコースデザインの「何ニ基ヅキ」（目標）、「何ヲ」（内容）、「イツ・ドノヨウニ」（時期と期間・方法）のそれぞれが見直され、「一貫しない教育目標」、「表現形式に偏る教育内容」、「不適切な教育時期と期間」、「学習者の主体性を重んじない教育方法」という四つの問題点の改善につながると指摘し、再考するための具体的な試みについても提案した。②教科書における敬語に関する記述を改めることと教科書を通して適宜に副教材と補助教材を示すことにより、敬語教育の教材が見直され、「再考すべき教材における扱い方」という問題点の改善につながると指摘し、具体的な試みについても提案した。③教師が敬語教育を行う際拠り所になっている教科書と教師用指導書を通し、知識や情報を提供し、気づきや示唆を与えることにより、「敬語教育に苦手意識を抱く教師」という問題点の改善に結びつくだ



けでなく、自身の教育観や教科書に対する捉え方、教師の役割に対する認識などにおいて、教師の意識変化を促す重要な手段にもなると指摘し、具体的な試みについても提案した。

④学習者が教室を離れた後でも自律的に敬語が学べるよう、教科書における敬語の扱い方を再考することと、それぞれのニーズに合わせ、学習者に副教材と補助教材にも目を向けさせることにより、「教室内の指導に強く依存する学習者」という問題点の改善につながる」と指摘し、具体的な試みについても提案した。

## 第7章 中国の大学日本語専攻教科書における敬語の扱い方を再考するための前提

教科書における扱い方を再考すべきだという本研究の主張は、敬語に限らず、他の学習項目にも共通する課題であると述べた上で、その一方、他の学習項目とは異なる個別性も持っていることを論じた。それを踏まえ、現行の教科書における敬語の扱い方からうかがえる問題点として、それぞれ以下のように3点ずつ指摘した。

他の学習項目に共通する問題点：(1)教科書における扱い方には、①教師や学習者の困惑や誤解を招くようなものがある。②文法説明や練習問題など、教師主導型に適するものがほとんどである。③学習者の多様なニーズや自律学習が考慮されていない。(2)教師用指導書における扱い方には、教科書の問題点を補うような内容はほとんどなく、あまり機能していない。(3)教科書と教師用指導書以外に、学習者の多様なニーズに対応したり、自律学習を促したりするための副教材や補助教材の導入はあまり見られない。

他の学習項目とは異なる問題点：(1)敬語とは何か、その必要性和重要性など、学習者の敬語に関する基本的な認識を促し、育成するための記述が不足している。(2)敬語の分類や各種類の敬語の働き、表現形式など仕組みに関する記述には、学習者の混乱を引き起こすものが多い。(3)各敬語項目の文法説明や練習問題では、「だれが、だれに、どこで、なぜ」といった運用面を考慮した記述が行われていない。

次に、中国の大学日本語専攻教科書における敬語の扱いは、『教育要綱』における記述という内部の要因と、日本国内の日本語教科書における扱い方という外部の要因の両方から影響を受けていることが確認された。更に、日本国内の日本語教科書における敬語の扱い方には、山田孝雄を代表とする「敬語は敬意の表現である」という〈敬意〉の敬語論が投影されていることが判明した。そこで、先行研究の知見と筆者自身の経験を踏まえ、この敬語論を批判した上で、現行の日本語教科書における敬語の扱いは、その影響により、

意識面・形式面・運用面が混在している傾向が強いことと、それが教師と学習者の敬語に対する理解を阻害してしまう要素として働いていることを指摘した。したがって、中国の大学日本語専攻教科書における敬語の扱い方を再考するには、まず「敬語とは何か。敬語をどのように捉えるべきなのか」という根本的なところから見直す必要があると提案した。

以上を踏まえ、本研究では蒲谷（2013）の敬語論を受け継ぎ、敬語を「語としての敬語」と「敬語表現における敬語」という二段階で捉える。これに基づき、教科書において敬語を扱う際、前者にとって重要となるのは、敬語の分類、働き、表現形式といった体系的な知識を正確に記述することに対し、後者にとって重要となるのは、人間関係や場に合わせ、どのように適切に敬語を用い、コミュニケーションを行うのかを明確に記述することであると考え、両方の観点が不可欠でありつつも、互いに混淆してしまわないように区別して記述を行う必要があると述べた。そして、殊に本研究のような海外にいる学習者を対象とする場合、上記両者の前提と基盤として、日本語の敬語の特徴や母語との比較、敬語を学ぶ必要性と重要性といった認識面を考慮した記述も必要であると主張した。よって、ここからは現行の記述からうかがえる三つの問題点を「敬語の基本認識に関する記述の不足」、「語としての敬語」に関する記述の混乱」、「敬語表現における敬語」に関する記述の無考慮」と新たに名づけた。

そして、敬語を教える際も、上述した三つの問題点をすべて射程に入れる必要があると指摘した上で、最後に敬語教育の目的（学習者自身がコミュニケーションの主体となって、自ら敬語を用いて、適切にコミュニケーションを行うことにより、その力を身につけ、高めてもらう力を育てること）や目指したい敬語教育（学習者が主体的・自律的に敬語について考え、コミュニケーションの中で敬語を学び、教師がそれを支援するとともに、学習者と一緒に考えたり、よりよい解決策を探したりすることで、ともに成長していく教育）などについて、本研究の考えを示した。

## 第8章 敬語の基本認識に関する記述の提案

意識面に焦点を当て、敬語の基本認識に関する記述の不足という問題点の実態を検証するために、中国の大学日本語専攻教材における敬語の基本認識に関する記述を分析した。その結果、「敬語の定義と特徴があまり記述されていない」、「敬語の必要性と重要性が十分に明記されていない」、「敬語に関する誤解や注意点など中国人学習者の視点を考慮して

いない」、「中国語における敬語の知識を完全に度外視している」という四つの問題点が見えてきた。

以上の問題点に対し、先行研究を踏まえた上で、以下の改善策を提案した。①敬語の定義と特徴に関する記述（例えば、日本語の敬語はどういうものなのか、日本語の敬語はどのような特徴があるのか、日本語の敬語と中国語の敬語との共通点や相違点は何なのか、等）を加える。②敬語の必要性和重要性（例えば、日本社会では敬語はなぜ欠かせないのか、敬語が使えることのメリットは何なのか、敬語を使わないことによるデメリットは何なのか、等）を明記する。③敬語に関する誤解や注意点（例えば、中国人日本語学習者が敬語を学ぶ際生じやすい誤解、敬語を使う際注意したほうがよいところ、等）をまとめる。そして、以上の改善策に基づき、目指したい敬語の基本認識に関する記述について、新たな試案を構想し、具体的に示した。

## 第9章 「語としての敬語」に関する記述の提案

形式面に焦点を当て、「語としての敬語」に関する記述の混乱という問題点の実態を検証するために、中国の大学日本語専攻教材における「語としての敬語」に関する記述を分析した。その結果、「敬語の分類がまちまちで統一されていない」、「尊敬語と謙譲語の働きに関する記述が意識に偏りすぎている」、「敬語の使用対象に関する記述が矮小化されている」、「丁寧語、丁重語や美化語の位置づけが不明である」、「敬語の表現形式が明確に整理されていない」という五つの問題点が見えてきた。

以上の問題点に対し、先行研究を踏まえた上で、以下の改善策を提案した。①敬語の種類に関する記述を訂正する（具体的には、『敬語の指針』の五分法を取り入れる、謙譲語と丁重語を区別する、美化語を丁寧語から独立させる、等）。②敬語の働きに関する記述を再考する（具体的には、人間関係や意識などの要素を外し、客観的に記述する、謙譲語と丁重語の働きの違いを明記する、丁寧語と美化語を区別し、それぞれの働きを補足する、等）。③敬語の形に関する記述を整理する（具体的には、種類ごとに代表例のほかに一般化された表現形式をまとめる、一般化された表現形式に具体的な使用例も添える、各表現形式の適用範囲を記載する、等）。そして、以上の改善策に基づき、目指したい「語としての敬語」に関する記述について、新たな試案を構想し、具体的に示した。

## 第10章 「敬語表現における敬語」に関する記述の提案

運用面に焦点を当て、「敬語表現における敬語」に関する記述の無考慮という問題点の実態を検証するために、中国の大学日本語専攻教材における「敬語表現における敬語」に関する記述を分析した。その結果、「表現形式の単一化」、「語彙や文法としてしか扱われない」、「人間関係設定の乏しさ」、「コミュニケーション場面と切り離されている」という四つの問題点が見えてきた。

以上の問題点に対し、先行研究を踏まえた上で、コミュニケーションの観点を取り入れ、「だれが、だれに、どこで、なぜ」といった実際の場面の中で、敬語使用例や練習問題を示すべきだということを提案した。そして、蒲谷他（2010）で提唱されている「敬語化」、「敬語表現化」、「敬語コミュニケーション化」という三つの概念を援用し、教科書において、語彙としての敬語化→表現における敬語化→コミュニケーションにおける敬語化という三つの段階に分け、練習問題を示す方法を提示した。最後に、以上の改善案に基づき、目指したい「敬語表現における敬語」に関する記述について、新たな試案を構想し、具体的に示した。

## 第 11 章 教科書における敬語の新たな記述に対する現場教師のフィードバック

第 11 章では、第 8 章から第 10 章の記述試案例を中国の大学日本語専攻教育現場に携わっている教師たちに見てもらい、評価や感想、助言など、フィードバックを得るための調査を行った。フィードバック調査の概要や結果及び得られた示唆について、簡単にまとめると、以下のようになる。

まず調査目的は、以下の 2 点である。【1】本研究が考案した敬語に関する新たな記述試案例を中国の大学日本語専攻教育現場に携わっている教師に見てもらい、評価や感想、助言など、フィードバックを得る。【2】記述試案例に対する現場教師のフィードバックを分析し、評価されたところや気づいた反省点をまとめ、今後敬語の新たな記述を模索するための課題を検討する。調査においては、中国各地の大学で、日本語専攻教育現場に携わっている中国人教師 9 名に協力してもらった。具体的には、調査倫理の承認取得→調査協力者の許可取得→調査者の資料（5 種類）送付→調査協力者の資料閲読→インタビュー調査の実施→データの整理という六つのステップを踏んで、調査を実施した。

その結果、学習者向けの教科書記述試案例についても、教師向けの指導手引書記述試案例についても、調査協力者からは様々な意見を得ることができた。それらを整理した結果、主に以下の二つが明らかとなった。一つ目は、学習者向けの教科書記述試案例に対しても、

教師向けの指導手引書記述試案例に対しても、調査協力者からは概ね好評な意見が寄せられていることである。二つ目は、調査協力者からは、本研究の第3章から第5章の調査結果と一致する意見が得られたことである。

そして、調査協力者から得られた意見に基づき、初級の精読授業における使い方の検討、場面のバリエーション上の考慮、課題の出題形式の多様化、音声や映像の取り入れという4点が反省点として挙げられる。そこで、反省点を踏まえ、今後の課題として、次の5点を示した。①本試案は初級の精読授業でも活用されるよう、その使い方について詳しく検討した上で、教案などの形で詳細かつ明確に示す。②中国にいる学習者がよりイメージしやすくなるよう、彼らにとって身近にある場面を多く取り上げ、敬語の使い方を扱う。③各レベルの学習者を考慮し、初級の学習者でもスムーズに関われるよう、課題形式の多様化を模索する。④学習者により直感的なインプットを提供できるよう、CDやDVDを視野に入れ、音声や映像の導入を検討する。⑤今回のフィードバック調査の結果に基づき、記述試案を修正した後、それを使って授業実践を行い、その効果を検証する。

## 第12章 まとめと今後の課題

第12章では、本研究の全体像を図で示し、各章、各節で述べてきたことの要点をまとめた。研究目的と合わせ、本研究の結論を簡潔にまとめると、以下のようになる。研究目的(1)中国の大学日本語専攻教育における敬語教育には問題点があるのか。あるとすれば、具体的にどのような問題点があるのか。→元学習者・現場教師・関連教材という三つの観点から調査を行った結果、「一貫しない教育目標」、「不適切な教育時期と期間」、「表現形式に偏る教育内容」、「学習者の主体性を重んじない教育方法」、「再考すべき教材における扱い方」、「敬語教育に苦手意識を抱く教師」、「教室内の指導に強く依存する学習者」という七つの問題点が存在していることが確認された。

研究目的(2)問題点を改善するためには、どうすればよいのか。→中国の大学日本語専攻教育において決定的な役割を果たしている教科書に焦点を当て、敬語に関する新たな記述を目指すことを改善の第一歩にすべきだと主張する。具体的には、現状の記述に見られる他の学習項目に共通する問題点(「教科書における扱い方の不十分」、「教師用指導書における扱い方の不機能」、「副教材や補助教材の不使用」)、及び他の学習項目とは異なる問題点(「敬語の基本認識に関する記述の不足」、「語としての敬語」に関する記述の混乱)、

「敬語表現における敬語」に関する記述の無考慮)が改善されるよう、教科書における敬語に関する記述を新たに行うべきだということである。

次に、日本語教育分野における本研究の学術的な特色としては、次の4点が挙げられる。

①中国の大学日本語専攻教育における敬語教育について、あまり研究されていないという学術的な空白を埋めることができた。②従来の主流である内省研究や量的研究ではなく、質的手法を用い、調査協力者である学習者と教師の語りに耳を傾け、彼らの発見や洞察、理解を尊重した研究である。③従来の研究では、あまり目を向けられてこなかった教科書を中心とする教材も視野に入れ、詳細に分析することにより、新たな示唆を得ることができた。④指導上の問題点を指摘し、改善するための提言を試みる段階にとどまるという従来の研究を乗り越え、改善案に基づき、具体的な記述試案を示した。更に、本研究は中国の大学日本語専攻教育における敬語教育のあり方を改善することを目的とする研究であるが、その研究成果は中国の大学日本語専攻教育全体と日本語教育全体の両方にとっても重要な意義を持つことを述べた。

今後の課題として、本研究で提唱した新たな記述試案を用いた授業実践を行い、よりよいものになるよう工夫していきたい。

## 【引用文献】

蒲谷宏・川口義一・坂本恵（1998）『敬語表現』大修館書店

蒲谷宏・金東奎・吉川香緒子・高木美嘉・宇都宮陽子（2010）『敬語コミュニケーション』朝倉書店

蒲谷宏（2013）『待遇コミュニケーション論』大修館書店

国際交流基金（2014）日本語教育－調査研究・情報提供－国・地域別の情報－中国

<http://www.jpfa.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2014/china.html>

（最終アクセス：2015年6月1日）

山田孝雄（1924）『敬語法の研究』宝文館

中国教育部高等学校外语专业教学指导委员会日语组编（2001）《高等院校日语专业基础阶段教学大纲》大连理工大学出版社

中国教育部高等学校外语专业教学指导委员会日语组编（2000）《高等院校日语专业高年级阶段教学大纲》大连理工大学出版社